

みちもり “道守” ~古代からの遺伝子~

1. インフラ長寿命化センター

平成18年に長崎大学工学部インフラ長寿命化センター（以下、「センター」という）が設立されました。「そんな時代によくも“インフラ”のセンターを創れましたね」とよく尋ねられます。当時は新自由主義経済学のいう小さい政府の小泉政権下、郵政民営化の旗印とともに、道路公団民営化や道路特定財源の一般財源化がなされ、公共事業は平成13年11.8兆円から平成18年7.8兆円に大幅に削減された時代です。国立大学も行財政改革のもとに法人化されました。「ヒト・モノ・場所・カネも何もないバーチャルなセンターで、外部資金を獲得し、実質的なセンターとして機能させたい」と教授会議事録にはあります。

センターのミッションは、インフラ長寿命化に関する教育研究拠点を形成することでしたが、工学部の中で実質的なセンターの運営を実現するために、外部資金を獲得することを最大のミッションとして活動を開始しました。

2. 道守養成講座

道守養成講座は、インフラ構造物の点検診断と長寿命化が喫緊の課題となる前の平成20年度から文部科学省「科学技術振興調整費」の支援を得て開始されました。

観光立県を推進する長崎県には、「軍艦島をはじめとする明治日本の産業革命遺産」や「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」等の観光資源が半島や離島に点在しており、それらを結ぶ道路、渡海橋、港湾等のインフラ構造物が多数存在し、現在老朽化が進行しています。

一方、県の財政状況は厳しく、建設事業費は削減され、維持管理費の増額も見込めない状況にあります。今後50~100年を見据えたとき、インフラ構造物の維持管理に関しては費用や人材の面で大きな課題があります。そのような状況のなか、長崎県と連携を図り、県内の自治体職員、建設業、コンサルタント業、NPO、地域住民を対象とし、“まちおこし”の基盤となる道路インフラ施設の維持管理や長寿命化に係る各種技術レベルの“道守”を養成することにしました。これにより観光立県の推進に貢献するとともに、新たなインフラ維持管理技術を振興し、地域の再生と活性化を支援するために、センターが母体となって道守講座システムを確立してきました。

道守養成講座は4コースで構成されます。“道守補助員”は入門コースで道路の異常に気付ける一般市民を対象としています。“道守補”、“特定道守”及び“道守”は土木技術者を対象とした専門コースで、それぞれ、点検、診断、マネジメントを担当できることを到達レベルに置いています。

平成26年に、長崎大学で養成してきた“道守”は、国土交通省の社会資本の維持管理及び更新を確実にするための民間資格として、「道路施設の鋼橋、コンクリート橋及びトンネルに対する点検と診断の担当技術者」の業務で登録されました。

“道守補”以上の認定者の人数が増えてくると、“道守”の活用の議論がなされ、平成26年度から長崎県橋梁点検業務委託事業において、“道守”が配置技術者の要件に加えられました。平成27年度からは国土交通省九州地方整備局の業務の総合評価落札方式において“道守”を含む登録技術

長崎大学大学院 工学研究科
システム科学専攻 教授
インフラ長寿命化センター長

まつ だ
松 田
ひろし
浩



者資格が配置技術者の評価に組み込まれています。工事についても活用の仕組みが検討され、さまざまな形で実現することが期待されます。

3. 貧困撲滅のためのインフラ整備

今年1月29日に岐阜大学シンポジウム「続・安全な“みち”のために」に参加しました。道普請人理事長木村亮京都大学教授の基調講演「世界の未舗装道路を住民と治す」では、土木技術で貧困削減を可能にするために、アフリカで住民とともに“道直し”を行い、人々の暮らしを守り豊かにするという土木の原点のお話がありました。病院や学校を造っても、道がないと機能しないと。

講演を聴いて、平成14年のアフリカ・ヨハネスブルグ・サミットでの国連環境計画親善大使としての加藤登紀子さんの言葉と、ペシャワール会の中村哲医師のアフガニスタンでの土木事業を思い浮かべました。加藤登紀子さんは次のように述べておられます。

「現地のある女性が訴えました。『私達は決して、世界が言うようにプアではない。大切にしてきた水や土、山などの豊かな自然、そして長年培ってきた文化が私たちにはある。それを忘れないでほしい』。貧困撲滅は会議の大きなテーマでしたが、何が貧困なのか、何を貧困と呼ぶのかについて、もっと議論する必要があると感じました」と。

中村哲医師（火野葦平の甥）は、アフガン難民の診療に携わったのをきっかけに、井戸・水路工事による水源確保事業など現地での支援活動を続けておられます。澤地久枝氏はNHKのテレビで「私は著書の宣伝をしたことはないけど、この本

“人は愛するに足り、真心は信ずるに足る”はぜひ買って読んでいただきたい。収益はペシャワール会に全部寄附する」と話されていました。

4. 質の高いインフラ整備が国民生活を豊かにする

講義や講演で、「インフラとは“人間が人間らしい生活を送るために必要な大事業”であり、“膨大な経費をかけ多くの人々が参加し長い歳月を要して現実化するもの”」と塩野七生氏の「ローマ人の物語X」の一節をよく引用しています。

大石久和氏（元国土交通省技監）も建設業界誌で、「ドイツの競争力」は質の高い交通インフラ整備によるものであり、それ故にドイツ人は“1年に150日休んでも仕事が回る”と断言されています。また、IMF（国際通貨基金）については、新自由主義経済学の緊縮財政を迫って小さな政府を要求していた時代と全く様相を異にし、いまでは「公共インフラへの投資の増大は残された数少ない成長促進のための政策手段である」とインフラ整備の重要性を説くほどに変貌したことを指摘されています。

我が国でも、日本再興戦略～Japan is Back～で「安全・便利で経済的な世界に先駆けた次世代インフラの構築」が謳われています。インフラの重要性は、建設事業に携わる人々だけでなく、広く一般市民の合意として浸透していかなければならないと思います。日本でも、遙か律令制時代に大化の改新の詔で謳われた古代の道「七道駅路」が造られています。その時には租庸調のほかに雑徭（そようちょう）という労役がありました。その労役の遺伝子が“道普請”、そして“道守”にも繋がっているように思います。